
聖夜の宝石盗難事件 (DCNバージョン)

ともゆき

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

聖夜の宝石盗難事件（DCNバージョン）

【コード】

N5988A

【作者名】

ともゆき

【あらすじ】

クリスマスイブの夜。その日蘭たちは鈴木家のX'masパーティーに呼ばれた。しかし、そこで一瞬にして宝石が盗まれた！

「ねえ、コナンくん」

12月22日、帝丹小学校の休み時間。吉田歩美が江戸川コナンに話し掛ける。

「なに、歩美ちゃん？」

「クリスマスプレゼント、何もらう？」

「…そういえば、明後日ですね」

円谷光彦が言う。

「…そういえばオレさあ、サンタクロースについてちょっと疑問があるんだよ」

小嶋元太だった。

「疑問、ってなんですか？」 「ほらさ、サンタクロースって暖炉の煙突から入って子供たちの靴下の中にプレゼント入れる、っていうよな」

「…それがどうかしたんですか？」

「12月つつつたら冬だろ？ 当然暖炉は燃えてるよな。サンタ本人は不死身の体だし」

「でも、何でプレゼントは燃えねえんだ？」

（…おいおい、燃え盛る暖炉の煙突から中に入る物好きなサンタが何処の世界にいるんだ？）

コナンは思った。

「…いくらサンタクロースでも煤だらけの身体で暖炉から現れたら、泥棒と間違えられるんじゃないの？」

同じことを考えてたか、コナンの隣で話を聞いていた灰原哀が呟いた。

「ハハハ、それもそうだな」

*

「ねえ、蘭」

同じく12月22日、帝丹高校の休み時間。鈴木園子が毛利蘭に話し掛ける。

「なに、園子？」

「あさつてのクリスマス・イヴにウチの伯母さまの家でクリスマスパーティーやるんだけど、来ない？」

「クリスマスパーティー？」

「そ。伯母さま、そういうの好きでさ。私も姉貴と一緒に招待されてるんだけど、蘭のお父さんのこと話したら『ぜひお呼びしなさい』って」

「お父さんの？」

「そ。あれで伯母さま、おじさんのファンなのよ。それで直接、おじさんの話を聞いてみたいんだって。それから…」

「それから？」

「伯母さまって実は子供がいないのよ。で、ついでにコナン君のこと話したら、ウチに呼びたい、って言ったのよ。…伯母様、って3年前にご主人　つまり伯父様ね　が亡くなってから一人暮らしだから、多分コナン君くらいの歳の子供が気になっちゃうのね。だから合わせてやりたいのよ」

*

12月24日、クリスマス・イヴ。

朝から雪が降り、夜になるとあたり一面に降り積もり、町はすっかりロマンティックなホワイトクリスマス…だったらしいのだが、東京じゃそんなことなんてめったに起こるものじゃない。しかし、さすがに町はクリスマス一色である。

さて、事務所の前で鈴木姉妹と合流したコナン達三人はその足で園子の伯母である鈴木美佐枝の家に向かった。

雨は夜更けすぎに　雪へと変わるだろう

Silent night, Holy night

きつと君は来ない　ひとりきりのクリスマス・イブ

S i l e n t n i g h t , H o l y n i g h t

心深く 秘めた思い 叶えられそうもない

必ず今夜なら 言えそうな気がした

S i l e n t n i g h t , H o l y n i g h t

（「クリスマス・イブ」作詞・

作曲／山下達郎）

コナンの隣でクリスマスの定番ソング「クリスマス・イブ」を口ずさむ蘭の鼻歌が聞こえてくる。

「クリスマスか…」

コナンは園子の姉・鈴木綾子が運転する車の中からクリスマスの賑わいを見せる町を見ていた。この一週間後には年越しソバを食って、初日の出を拝んで、初詣をするのだから日本人というのは面白い人種である。そういえばもう門松が立っている店もチラホラと見かける。

（…もう今年も終わりなんだな…）

コナンは思った。

*

「そろそろ着くわよ」

助手席の園子と言う。車は郊外を走っていた。

「でけえ…」

玄関の前に立ったコナンはつぶやいた。何せ園子は鈴木財閥の次女である。その伯母、すなわち園子の父親の姉がこのような家に住んでても不思議はないのだが、それでも圧倒されてしまう。

「あらあら、綾子さんに園子さん、いらっしやい」

玄関に入るとひとりの女性が出迎えた。

「伯母さま、お邪魔いたします」

鈴木姉妹が言う。ということはこの女性が園子の言っていた伯母か？

「伯母様、紹介するわね。私の親友の毛利蘭とお父様の小五郎さん。それから蘭の所で預かっている江戸川コナン君よ」

「はじめまして、毛利です」

「毛利さん。お噂はかねがね園子さんのほうから伺っておりますわ。外は寒いでしょう？」

ささ、中へ入ってくださいな」

*

客間に通されると、そこには2人の男女がいた。

「…また来たんですか？」

美佐枝が男に話しかける。

「…すみません、もう伯母さんしか頼れる人がいないんですよ」

「…それは紀一郎さん自身の責任でしょ？ 悪いけど、私ももうあなたに貸すお金など残っていません」

…その時、家の中の電話がなった。

「…奥の部屋の電話が鳴ってるんですわ。ちよつと失礼」

そういつと美佐枝は奥に引っ込んでしまった。

それを見送る男。…と、小五郎たちに気付いたか、

「これはお恥ずかしいところをお見せしました。…あなたが毛利さんですか」

男が小五郎に近付き、握手を求めた。

「ああ、はじめまして。…あなたは？」

「私の従姉妹の旦那さんで橋本紀一郎さん。会社を経営してるんですって。で女性の方は紀一郎さんの奥さんで私の従姉妹の成美さんよ」

園子が説明した。

「…あの二人も招待されたの？」

蘭が園子に小声で聞いた。

「…まさか。たぶんお金借りに来たのよ。紀一郎さんの会社、今経営危ないんですって。このままじゃ年明け早々には潰れるんじゃないか、って言われてるのよ」

園子が小声で言う。

（…だるーな。とてもじゃねえけど呼ばれたようには見えねえぜ）
コナンは思った。

「蘭、ちょっといい？」

園子が蘭に話しかけてきた。

「どうしたの？」

「伯母様が料理運ぶの手伝って欲しい、って言うのよ。蘭も手伝ってくれる？」

「…私があ？」

「お客様使うのもなんだけど、いいじゃない、ね。お願い」

「…わかったわよ」

そういうと蘭、園子、綾子の3人は厨房に消えていった。

*

「お父さん、コナン君、準備できたわよ」

程なく蘭がコナンたちを呼びに来た。

それを聞いた二人は食堂に入った。

既に正面に美佐枝が座っており、その右隣に鈴木姉妹が、左には蘭が座っていた。コナンは蘭の隣に座り、その隣には小五郎が、そして鈴木姉妹の隣に橋本夫妻が座った。

程なくクリスマスパーティーが始まった。

蘭、園子、綾子の3人は女同士で話が盛り上がり、園子の従姉妹の橋本夫婦は小五郎にこれまで関わった事件について色々聞いていた。小五郎も小五郎で今までコナンが解決してきた事件をさも自分が推理してきたかのように吹聴するものだから、コナンは聞いてて「それはオレが解決してきた事件だ」とツツコミを入れた

くなるのをこらえるのに必死だった。

「…どうしたの、コナン君。もっとお食べなさいよ」

そんなコナンを見たか、美佐枝が話しかけてきた。

「え？ あ、うん」

そう言われてコナンはフォークを動かし始めた。

「…そういえば、コナン君のお父様とお母様は何してるの？」

「あ、その…、仕事の都合で外国に行ってるんだ」

「そう…、それで、お正月には帰ってくるのかしら？」

「い、いや、その…。仕事が忙しくて帰って来れないらしいんだ」

「そう…。お正月くらい帰ってくればいいのにな…」

（…そういえばあの二人、今頃何やってんだ？）

コナンは両親 勿論父親で推理作家の工藤優作とたまに毛利探偵事務所の電話に「コナンの母親である江戸川文代」と名乗って電話をかけてくる母親で元女優の有希子の事だが、 を考えていた。

食事が終わりに近付いて来た頃だった。

「…紅茶を持ってきましようか？」

美佐枝が言う。と、

「あ、私が持つてきます」

橋本成美が立ち上がった。

程なく、彼女が人数分のカップと紅茶の入ったポットが乗ったワゴンを運んできた。

ポットからカップに紅茶を注ぐと、めいめいにそれを渡す。

成美が最初に紅茶に砂糖を入れると、後は順繰りに回していった。

その場にいた全員が紅茶に砂糖やレモンを入れていった。

「毛利さん、実はあなたにお見せしたいものがあるんです」

美佐枝がいきなり小五郎に話しかけてきた。

「私に…ですか？」

「ちよっとお待ちくださいな」

そう言うと美佐枝は何やら小箱を持ってきた。

その小箱の形状から何やら宝石らしきものが入っているのは、小五郎でなくともわかる。

「宝石…ですか？」

小五郎が聞く。

「その通りですわ」

そう言うと美佐枝は蓋を開けた。中にはかなり大粒のダイヤが入っていた。

「…これは…」

「主人が亡くなる前に私に買ってくれたダイヤですわ。時価3千、いえ5千万円はするのではないか、といわれてるんですわ」

「5000万円？」

小五郎が素つ頓狂な声を上げる。

それを聞いたその場にいた全員が驚きの表情を浮かべた。

「ええ、これだけの宝石めつたにないものだから売ってくれ、と言う人が多いんですが、私にとってこれは大切な主人との思い出の品ですから、どうしても手放す訳には行かないんですよ」

「…しかし、これだけの宝石、管理するのも大変でしょう」

「ええ。いつもは金庫にしまっておるんですが、時々はこうして眺めてるんですよ」

「…でも、それを何故私などに？」

「それはですね…」

「…あれ、どうしたんだ？」

不意にコナンは眠気が襲ってきたのを感じた。

「…どうしたの、コナン君？」

蘭がコナンに話しかけた。

「…う…ん、何か…眠くて…」

「コナン君も…なの？」

何か睡眠薬を飲まされたらしい、とわかった時、さすがのコナン

も睡魔には勝てなかったか、眠りに落ちていった。

「コナンは不意に目が覚めた。慌てて腕時計型麻醉銃を見る。あれから1時間近くたっていたようだった。」

それを合図にしたかのように全員が次第に目を覚ました。

「…姉貴、アレ見て！」

園子が不意に大声を上げた。

その場にいた全員が絶句した。

宝石箱に入っていたダイヤが跡形もなく消えていたからだ。

*

程なく目暮警部達が現場に到着した。

「…というと、犯人はその全員が眠っている間に、ダイヤを盗んだ、とこういうわけか？」

「…恐らくそうだと思います」

事情聴取を受けた小五郎が言う。

「…で、その皆が眠っていた時間、と言うのはどのくらいだったんだ？」

「…そうですねえ、私もはっきりとはわからないんですが、1時間前後ではなかったのではないのでしょうか？」

「となると、犯人はその間にダイヤを盗んだ、とこういうわけになるな」

「…奥さん」

目暮警部が美佐枝に話しかけてきた。

「盗まれたダイヤというのはどれほどの価値のものなんですか？」

「…はい、死んだ主人に買ってもらったもので…。時価5千万はする、と言われているものですよ」

「…それはここにいる全員が知っていることですか？」

「はい。私が直接皆さんに見せましたから。…いえ、勿論念のため

に保険には入っていますが、それよりもアレが無くなった事の方が
…」

「警部」

目暮警部の部下である高木刑事が話しかけてきた。

「何かわかったか？」

「はい。犯行が行われたと思われる時刻前後には怪しい人影を見かけた、と言う目撃証言はありませんでした」

「となると、内部のものの犯行の可能性が高い、と言うわけか？」

「…恐らくそうではないかと」

（…確かにそう考えるのが普通だよな…）

コナンは思った。

（…おそらく、オレたちが飲んだあの紅茶の中に睡眠薬が仕込んであったはずだ。…でも待てよ？ 犯人が内部の人間だとすると、犯人は自分だけどうやって睡眠薬の入ってない紅茶を飲むことが出来るんだ？ …アレはポットからカップに注いだから、自分だけ睡眠薬の入っていない紅茶を飲むなんて不可能な事だし…）

その時だった。鑑識課員が目暮警部の元に来た。

「警部。鑑識の結果が出ました。睡眠薬は砂糖入れの中から検出されました」

「砂糖入れじゃと？」

「はい。おそらく紅茶の中にそれを入れたので、その場にいた全員が眠くなったのではないかと」

（…砂糖入れか…。確かにオレを含む全員があの時砂糖を入れて飲んだからな…。でもそうだとすると犯人だって眠くなるはずだろ？

自分だけ眠くならない、何て芸当が出来るはずないだろ？）

コナンはため息をひとつついた。

何気なくテーブルを見ると、全員が飲んだ紅茶がそのままになっていた。

（…この中に入っていたんだよね…）

コナンは何気なく砂糖入れの蓋を開けると、中のスプーンを取り出した。

その時だった。不意にコナンの脳裏に電撃が走った。

（…そうか、アレだったらできる。アレならば自分だけ睡眠薬を飲まない事も出来るぞ！…そうか、解かったぞ。宝石を盗んだのはあの人だったんだ）

そしてコナンは麻醉銃を小五郎に向けた。

「…うっ、また眠くなった…」

「高木君！」

目暮警部が高木刑事を呼んだ。

「…どうだ、宝石は見つかったか？」

「いえ、室内の何処にも見当たりません」

「そうか…」

「…警部、どうします？ こうなったらここにいる全員の身体検査をしますか？」

高木刑事が目暮警部に聞いた。

「止むを得んだろ。至急本庁から婦警を2、3人呼んでだな…」

「…その必要はありませんよ、目暮警部」

いきなり小五郎の声がした。

「なんじゃと？」

目暮警部はテーブルを見た。

小五郎がテーブルに座っていた。そしてその陰にはコナンが座っている。

「…お父さん、犯人がわかったって言うの？」

蘭が聞く。

「ああ、その通りだ。まず言うておきましょう。犯人は我々の中に

います！」

「なんじゃと？」

「今回の事件のポイントは全員が飲んだ紅茶にあります」

「紅茶がどうかしたのかね？」

「あの紅茶の砂糖入れに睡眠薬が入っていた、と言いましたよね？
我々は全員がその紅茶に砂糖を入れて飲んだために眠ってしまった。
…しかし犯人だけは睡眠薬入りの紅茶を飲まないで済む方法があるんですよ」

「オイオイ無茶を言うな。全員が砂糖を紅茶を入れて飲んだ、と言ったのは君のほうだろ？」

「確かにそうですが、意外と簡単な方法で出来るんですよ。…蘭！
何？」

「テーブルの上にある砂糖入れを持ってきてくれないか？」

言われた蘭が砂糖入れを持ってきた。

「蘭、オレの言うとおりやってみてくれ。…まず犯人は砂糖入れの中にスプーンを入れます」

そういわれた蘭が砂糖入れにスプーンを入れる。

「…次に犯人は砂糖入れの上に睡眠薬を盛ります。…といっても睡眠薬がありませんからなあ。何か替わりになるものがあるといいんですが…」

「あ、インスタント・コーヒーがありますわ」

美佐枝が言う。

「すみません、じゃ、それを持ってきてくれませんか？」

やがて美佐枝が持ってきたインスタント・コーヒーを蘭が砂糖入れの上に振りかけた。

「あとは簡単です。蘭、普段紅茶に砂糖を入れるようにスプーンを持ち上げてみる」

そういわれた蘭がスプーンを持ち上げた。

「あ…」

蘭が驚きの声を上げる。スプーンには砂糖しかなかったのだ。

「…おわかりでしょう？ 一番最初に砂糖を入れるときだけは底の方から引き揚げるから睡眠薬を飲む事はありません。借りに飲んだとしても極めて微量です。残った我々は上の方から砂糖をすくって入れますから、睡眠薬を飲んでしまうことになるわけですよ。砂糖を入れる際には底の方から救う人はまずいませんからなあ。私もそのトリックに引っかかってしまい睡眠薬入りの紅茶を飲んでしまったわけですが…。となると、犯人は一番最初に砂糖を紅茶に入れた人物と言う事になるわけですよ。…私はその時の様子を見ましたが、確かあなたが一番最初に紅茶に砂糖を入れましたよね、橋本成美さん？」

「で、結局どうしてあんなことしたの？」

蘭が園子に聞いた。

「ああ、あれね。…あのふたり、随分夫婦仲冷え切ってたらしいわ。紀一郎さんが会社の事にかかりつきりで成美さんのこと構う暇ななかなかだったそうなのよ」

「…それから成美さん、凄まじい位の濫費を始めて、余計に借金が増えてしまったのよ。私の家にも借金のお願いに来たことが何回もあるし…」

綾子が言う。

「ふうん…。じゃあ、成美さん、借金の返済に充てようとして宝石を…」

「…そういうことになるわね。ゴメン、蘭。おじさんたちを呼んだばっかりにこんな事になっちゃって…」

「いいのよ、気にしてないから。それよりさ、カラオケにでも行くか」

「そうね。じゃ姉貴、いつものところお願い」

イヴの夜はまだ始まったばかりである。

（終わり）

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5988a/>

聖夜の宝石盗難事件（DCNバージョン）

2009年2月16日18時15分発行